

令和七年度

第五十四回 さくらんぼの都市さがえ全国俳句大会

第四十五回 さくらんぼの都市さがえ

全国小・中学生俳句大会

入選句集

令和七年六月二十九日 寒河江市文化センター

主催 さくらんぼの都市さがえ全国俳句大会実行委員会

共催 寒河江市立図書館

後援 寒河江市・寒河江市教育委員会

寒河江四季のまつり実行委員会



第五十四回

さくらんぼの都市まちさがえ全国俳句大会

第四十五回

さくらんぼの都市まちさがえ全国小・中学生俳句大会

入選句集

選者

武佐阿加松武細
田々部藤田田谷
菜龍栄弘詩曉
美雄子仁三子々
先生先生先生先生先生先生

さくらんぼの実る頃

実行委員長 武田 詩 子

爽やかな風の中、さくらんぼの実る頃には寒河江の都市まちはさくらんぼの色一色に染まります。「第54回さくらんぼの都市まちさがえ全国俳句大会」兼「第45回さくらんぼの都市まちさがえ全国小・中学生俳句大会」を迎えるにあたり、全国から多くの応募句がありましたこと、大変嬉しく心からお礼を申し上げます。

振り返りますと、平成23年まで41年間続いた、「さくらんぼ祭り全国俳句大会・主催寒河江四季のまつり実行委員会」を一つの俳句結社で運営していたため、先細りとなり継続が危ぶまれる事態となりました。

存続するかどうかを含め市立図書館と相談し、伝統ある座の文化を絶やすことはできないと市内6つの俳句結社同士が協力、新たな実行委員会を組織しスタートをしたのです。

その記念すべき第42回大会で、ご講演と中央選者を細谷曉々先生にお願いしました。その後の15年間で、名だたる俳人の方々がご来寒下さり、この大会を応援していただきましたこと、改めて感謝申しあげます。

俳句は身近な一行詩、その時々自分史とも言われております。その感性の珠玉の御句を来年もまたご応募くださることを願いながらご挨拶に代えさせていただきます。

寒河江市長賞

特選

跡を継ぐ一言だけのさくらんぼ

山形県寒河江市 小林

昭

寒河江四季のまつり実行委員会長賞

特選

稚児舞の鈴軽やかにさくらんぼ

山形県山形市 伊藤 めぐみ

秀逸

母となる覚悟日に日にさくらんぼ

山形県山形市 鈴木 あい

両の手をこぼれてゆきぬ祭笛

埼玉県春日部市 桐野 鈴子

秀逸

夏空や月山超えぬ種飛ばし

山形県寒河江市 斉藤 富士昭

さくらんぼ電話はみ出す山形弁

山形県山形市 遠藤 健二

細谷 嘯々賞

特選

月山の水に月山置く代田

東京都江戸川区 羽住博之

秀逸

さくらんぼ米寿の祖母の早歩き

東京都府中市 櫻井光

うれしさは箱開くるときさくらんぼ

鹿児島県鹿児島市 大川畑光詳

ヒジャープの子の目真ん丸さくらんぼ

宮城県多賀城市 阿部徳和

選評

特選

月山の水に月山置く代田

羽住博之

昔、山形県の運動会では必ず「スポーツ県民歌」なるものが歌われた。歌詞は（月山の雪ぐれない染めて朗らかに明けゆく新生日本）と始まる。山形盆地で育った私にとって月山が赤く染まるのは夕方の風景だったから、この歌詞は不思議でたまらなかった。後に庄内からの月山の朝焼けを眺め疑問は水解決した。この句はそんな日々を思い出させた。月山の雪解け水を溜めた準備万端の代田に残雪の月山が美しく映っている。なんと素敵な景色だろう。

秀逸

さくらんぼ米寿の祖母の早歩き

櫻井光

年をとると、今まで何の苦もなく出来ていたことが出来なくなる。百メートルの全力疾走が出来なくなつた衝撃的な瞬間を私ははつきりと記憶している。それとは違い、早歩きはいつの間にかできなくなる。この句の作者は十八歳のおばあちゃんを連れてさくらんぼは狩りに出かけたお孫さんの作品かもしれない。たわなに実つたさくらんぼの木を見たおばあちゃんがいつになく早足で歩いたのだ。孫の温かい眼差しがうれし。

秀逸

うれしさは箱開くるときさくらんぼ

大川畑光詳

小学生の頃まで家の庭に当時でも珍しかったナボレオン種の大樹があった。地元では大粒の見事なさくらんぼを「桜桃」、山桜や染井吉野の紫色の小さなさくらんぼは「さくらんぼ」と区別して呼んでいた時代である。桜桃に囲まれて育つた私でさえ現在の綺麗なさくらんぼに出会ふと思わず息を呑む思いがする。そんな思いが詰め込まれた一句。

秀逸

ヒジャープの子の目真ん丸さくらんぼ

阿部徳和

ヒジャープとは主としてイスラム教徒、またはその着用を法律で決めている国では非イスラム教徒も身につける女性用のスカーフと衣服である。もとはアラビア語で（覆うもの）を意味する。

この句のヒジャープは中7「子の目真ん丸」からスカーフと思われる。初めて見たさくらんぼの美しさにびびくりしたのか、食べてそのおいしさに驚いたのだろうか。可愛らしさを感じるやさしい句である。

ふと飯島晴子の伝説的名句を思つた。
旅客機閉さず秋風のアラフ服が最後

近詠

さくらんぼ種飛ばし会上天氣

武田詩子選

特選

月山の水に月山置く代田

東京都江戸川区 羽住博之

秀逸

ふらここの子が青空と会話する

愛知県東海市 斉藤浩美

跡を継ぐ一言だけのさくらんぼ

山形県寒河江市 小林昭

子のやうな母へひと粒さくらんぼ

京都府京都市 宮本紀久代

選評

武田詩子

特選 月山の水に月山置く代田

羽住博之

霊峰月山の山麓は湧水群として名水百選の一つに選ばれている。万年雪からの大量の雪解け水は、山麓の多数のブナ林の中を、滞流四百年を経て寒河江川となる。その水を取り入れた代掻きが終わる、いつでも田植ができる状態のが「代田」。鏡のように平らな田に五月晴れの月山が逆さに映っている情景を、さらりと詠んでいるが、描写の優れた心に残る佳句である。

秀逸 ふらここの子が青空と会話する

ふらここ（ふらんこ）は戦艦の事で半仙戯とも呼ばれ、中国の唐時代に冬至の後二〇五日目に麒麟に乗って遊ぶ風習があり春の季語となった。ふらんここと子どもの句は長く目にするが、青空と会話している子の景は可愛らしく新鮮である。微笑みながら子を見守っている親の景も見えて来る。

秀逸 跡を継ぐ一言だけのさくらんぼ

小林昭

いま、日本の農業は人手不足や高齢化が進み、農業を継ぐ人がなかなかいない、という深刻な現状である。田や畑が荒れるのを防ぐためJAやNPO法人などに委託する農家も増えているという。この句は中七の「ひと言だけの」に焦点を合わせて、息子と親との決意と安堵の心情が隠されている。

秀逸 子のやうな母へひと粒さくらんぼ

宮本紀久代

なんとも胸を揺さぶられる句柄である。母親は高齢になってもう子どもかえりをしたのだらうか。それともまだ若くして認知症などの病気になったのであろうか。いずれにしても母を愛しみ、温かい眼差しの作者の人物が伝わってくる。「ひと粒」のさくらんぼの描写がぐんと深みをましているのだ。

近詠 連翹や午後の出勤はスニーカー

佳作

春燈や芝居帰りの貝の口

東京都杉並区 原田 伸介

さくらんぼ口いっぱいの反抗期

兵庫県神戸市 平尾 美智男

夏の雲田舎銀座の理髪店

新潟県新潟市 長谷川 キミヨ

足跡に影が抜かれる夏の夕

大阪府寝屋川市 藤井 明都

母となる覚悟日に日にさくらんぼ

山形県山形市 鈴木 あい

ひと言が言えないままのさくらんぼ

京都府精華町 北尾 直美

つばくらめ民話の里は軒ふかく

愛知県東海市 岩間 康子

冬堇ハンカチほどの日溜まりに

東京都足立区 山崎 勝久

両の手をこぼれてゆきぬ祭笛

埼玉県春日部市 桐野 鈴子

降る雨の音ほがらかに夏来る

熊本県八代市 清水 正子

入選

反り美しき城の石垣花万朶

愛媛県松山市 林 一孝

先生のあだ名ノートに若葉風

山形県米沢市 猪俣 洋子

ふるさとは山のふくる、桜かな

山形県河北町 竹屋 峯子

さくらんぼ電話はみ出す山形弁

山形県山形市 遠藤 健二

さくらんぼ明日が最後の抗がん剤

福岡県北九州市 佐藤 節美

母と子の影の重なり春夕べ

東京都練馬区 小林 和子

あねおとと頑固と素直さくらんぼ

愛知県名古屋市 鈴木 薫

さくらんぼ都会の人は同じ顔

千葉県我孫子市 須賀 毅

新樹光日の斑の揺るる石畳

東京都品川区 蛭田 恒美

鬼ごっこ追ふ子逃げる子風光る

大阪府高槻市 打浪 絃一

松田弘三選

特選

こたつ舟ゆるりゆるりと最上川

富山県高岡市 岡野 満

秀逸

金閣の影に翳りて草取女

東京都中央区 北島 大果

さくらんぼ電話はみ出す山形弁

山形県山形市 遠藤 健二

さくらんぼ明日が最後の抗がん剤

福岡県北九州市 佐藤 節美

選評

松田弘三

特選 こたつ舟ゆるりゆるりと最上川

岡野 満

雪見舟と称しテレビなどで映像をよく見かけられる。炬燵を備え、暖を取りながらのんびりと川波に揺られながら下つて行くのである。

「ゆるりゆるり」のリフレインが冬の晴れた日を暗示しており、最上川の明るい一面を表現した作品である。

秀逸 金閣の影に翳りて草取女

北島 大果

京都鹿苑寺の金閣寺を管理している女性の様子。ポイントなっているのは「影に翳りて」である。なんとも京都の雰囲気かわせている表現ではないか。

神々しい雰囲気的光りの影に更に、そのかげで黙々と草引きをしている女性の姿が浮かんで来る。

秀逸 さくらんぼ電話はみ出す山形弁

遠藤 健二

さくらんぼを頂きそのお礼の電話のありさまを述べたもの。健康そうな大声での会話が受話器を飛び出して来るようだというのだ。なんともあきらかで健康そうな内容である。

力強い山形弁が聞こえてきそう。

秀逸 さくらんぼ明日が最後の抗がん剤

佐藤 節美

所謂さまざまな「癌」の治療は、現在では医療技術の進歩によりひと昔のそれとは大部違つて来ているようだ。闘病生活に耐えてきた処置も終わりに近づいた安堵感が良く出ている。

「さくらんぼ」の明るい季語が活かしている。

近詠 彩りを編みつつ葺きし花御堂

佳作

春うれひ義民の裔の屋敷林

長野県松本市 中村 百仙

親を引き祖父母を連れて入学児

千葉県松戸市 堀 卓

空を切る紙手裏剣や飛花落花

山形県村山市 布川 百合香

桜桃や利き手の違う二卵性

富山県滑川市 折田 祐美子

旗当番の旗花冷の自転車へ

福島県福島市 齋藤 美都里

百歳の文通の友さくらんぼ

青森県弘前市 橘 すなお

瀬に割れてまた流れ合ふ花筏

京都府京都市 青木 宣子

稚児舞の鈴軽やかにさくらんぼ

山形県山形市 伊藤 めいこ

鯉のぼり泳ぐみ空に産着干す

群馬県藤岡市 木下 薫

ヒジャープの子の目真ん丸さくらんぼ

宮城県多賀城市 阿部 徳和

入選

さくらんぼ空を引っぱるもみじの手

埼玉県春日部市 中野 弘樹

ところ天世間に出てはみたけれど

宮崎県宮崎市 莊子 隆

糸雨や花に染入り茎に攪り

和歌山県橋本市 徳永康人

町医者のスリッパ新品うらけし

山形県酒田市 加藤 昭一

手話の娘の指たをやかに摘む桜桃

埼玉県さいたま市 木村 隆夫

さくらんぼ口いっぱいの反抗期

兵庫県神戸市 平尾 美智男

さくらんぼ泣く子をあやす五歳の子

山形県天童市 岡田 久一

ふらここの子が青空と会話する

愛知県東海市 斉藤 浩美

悲しみのカンパネラ鳴る春の丘

栃木県宇都宮市 大島 康正

中敷きを引けば砂粒跳んで夏

滋賀県大津市 太田 華奈

加藤 仁 選

特 選

ヒジャーブの子の目真ん丸さくらんぼ

宮城県多賀城市 阿 部 徳 和

秀 逸

馴れ初めを語りだす母さくらんぼ

兵庫県神戸市 平 尾 美智男

夏空や月山超えぬ種飛ばし

山形県寒河江市 斉 藤 富士昭

花嫁は箱入娘さくらんぼ

東京都新宿区 宮 坂 恵 子

選 評

加 藤 仁

特選 ヒジャーブの子の目真ん丸さくらんぼ

ヒジャーブとは、イスラム教徒の女性が身体や髪、顔を覆う布、とあります。テレビなどで見る限り、丸い目だけを出した可愛い顔を見たことがあります。ヒジャーブを作者はいとも簡単に表現されていることから、現地でヒジャーブをされた人と親しくされたことがあるのかもかもしれません。可愛いなどとは言っていないですが、さくらんぼの季語と真ん丸い目が呼応して可愛い句となつてす。

秀逸 馴れ初めを語りだす母さくらんぼ

お父さんとの馴れ初めなど恥ずかしくなかなか話せないもので、娘さんは前々から何時か聞きたいとせつついていたのかも知れません。さくらんぼの雑語めをしていて二人だけになったラジオを聞きながらさくらんぼ時期の物語がお母さんから聞けました。私もそんな馴れ初めに出会いたいと思つたのでしよう。

秀逸 夏空や月山超えぬ種飛ばし

斉 藤 富士昭

種飛ばしだけでは、他県の人は何のことかわかりませんが、月山の表現で山形のさくらんぼの種飛ばし大会を想像できます。種飛ばし大会へ出場し、種飛ばす方の表情は可笑しさ一杯です。頑張ったが種は足元まで、とか、飛ばず種を飲んでしまったとか、色々です。月山超えぬの表現から作者も大会でたのでたでしょう。夏空と月山と作者が生き生きとしている情景が想像されます。

秀逸 花嫁は箱入り娘さくらんぼ

宮 坂 恵 子

当たり前のことを当たり前に詠まれた句ですが、さくらんぼによって、農家の生業が活写されています。さくらんぼを出荷するまでの農家の所作は、わが子を育てるに余りあります。

近詠 花桜桃月山茶碗のご飯のやう

佳作

賽銭もキャッシュレスの世余花の雨

山形県米沢市 猪俣 洋子

春の海太公望の大欠伸

富山県高岡市 岡野 満

春燈や芝居帰りの貝の口

東京都杉並区 原田 伸介

紙風船たましひほどの重さかな

大阪府吹田市 谷川 綾美

百歳の文通の友さくらんぼ

青森県弘前市 橘 すなお

さくらんぼ電話はみ出す山形弁

山形県山形市 遠藤 健二

さくらんぼ採った歓喜の肩車

福島県棚倉町 藤田 啓司

特養や届く故郷のさくらんぼ

東京都中央区 栗原 秀次

あねおとと頑固と素直さくらんぼ

愛知県名古屋市長 鈴木 薫

陸奥の雲の白さや田水張る

神奈川県藤沢市 青木 敏行

入選

月山の水に月山置く代田

東京都江戸川区 羽住 博之

高原の雲の興亡遠郭公

東京都中央区 北島 大果

羽州路の陣屋に纏ふ青時雨

山形県上山市 石黒 正二

群れといふ力たづさへ鳥帰る

青森県鶴田町 竹浪 誠也

BONSAIの鉢やローマ字の苗札

京都府京都市 藤本 かおり

ゴミ出しを忘れて釣りに四月馬鹿

愛知県名古屋市長 志村 紀昭

さくらんぼ都会の人は同じ顔

千葉県我孫子市 須賀 毅

両の手をこぼれてゆきぬ祭笛

埼玉県春日部市 桐野 鈴子

世を睨む不動尊にもさくらんぼ

静岡県静岡市 山下 奈美

楽し気な蛇行の植田実習田

佐賀県佐賀市 松尾 美咲

小学生の部

奨励賞 寒河江市立南部小学校

群馬県高崎市立城東小学校

阿部栄子選

特選

さくらんぼわたしのいえはだいせんそう

西根小 一年 國井唯花

ピカピカのじてんしゃつばめと風になる

寒河江小 二年 武田ゆう穂

遠足のおにぎり今日は大きいな

南部小 三年 大畠唯葉

選評

阿部栄子

さくらんぼわたしのいえはだいせんそう

國井唯花

いよいよさくらんぼシーズン到来。家の人みんなが朝早くから夜遅くまで一生懸命働いている様子を「だいせんそう」という言葉で、さくらんぼ時期の忙しさを強調していますね。

ピカピカのじてんしゃつばめと風になる

武田ゆう穂

ピカピカの新しい自転車を買ってもらったのですね。嬉しくお庭で乗っていると、ツバメもお空で飛んでいて、それを追っかけようとペダルを強く踏めば風のようになった気がしたのですね。

遠足のおにぎり今日は大きいな

大畠唯葉

今日は、待ちに待った楽しい遠足です。いつもお母さんが作ってくれるおにぎりより、今日のおにぎりは特別に大きかったのですね。唯葉さんが笑顔でおにぎりを食べている様子が目に浮かびます。

近詠 シロツメクサ花冠や郷恋ひし

秀 逸

通学はんちよこちよこ歩く一年生

南部小 五年 高橋 莉愛

時間割まだ空らの新学期

南部小 六年 長谷川 凜

ひなあられつまみ食いする男の子

群馬県城東小 六年 高山 愛 湊

テーブルに仲直り用のさくらんぼ

東京都清和小 六年 梅田 結衣子

佳 作

ぼくの町赤くそめてるさくらんぼ

寒河江中部小 四年 太田 千晴

ぼくのあせ未来のせんしゅゆめ見てる

南部小 三年 菊地 篤人

お兄ちゃん初きゅうりよう日桜まう

南部小 四年 沖津 叶心

ランドセル重くなつたよ新学年

柴橋小 四年 高橋 凜奈

たまごやきくるくるまいた春の朝

三泉小 四年 菅野 陽葵

入 選

さくらんぼりようていつぱいゆめつかむ

寒河江中部小 一年 たかはし みこ

はるかぜとはたけにいったらあーたのし

寒河江中部小 一年 木村 琉之介

らんどせるたくさんのゆめつまつて

寒河江中部小 一年 高橋 莉心

かけっこだつばめが空でよくに言う

寒河江中部小 二年 須貝 太賀

さくらんぼつみとる祖父のやさしい手

寒河江中部小 四年 椎名 ゆかり

新入生おうえんしている桜の木

寒河江中部小 六年 宮田 丈助

春風とじてん車きようそうぼくのかち

南部小 三年 佐藤 陽菜

はじめてのはいく教室さくらさく

南部小 三年 佐藤 滯

春の空おいしい風を吸おうかな

南部小 四年 前田 修吾

発表会そろいのTシャツさくらんぼ

南部小 四年 黒田 咲空

チューリップこせいゆたかないろづかい

南部小 四年 森岡 想介

母のかたに桜の花びらこんにちは

南部小 四年 高橋 一花

新学期ドキドキしながら自己紹介

南部小 五年 大沼 愛優

春の月算数のじゅくペダルこぐ

南部小 五年 伊藤 歩

ピヨーンとかえるになった跳べた八だん

南部小 五年 菅井 優弦

かんとくの声より高く夏の練習

南部小 六年 遠藤 成世

弟がキラキラ輝く入学式

南部小 六年 辻 日輝

春の風木と花ゆらし大合奏

南部小 六年 佐藤 優芽

教室の新しい椅子新学期

南部小 六年 佐藤 藍梨

ツバメの巣見上げ今年も待ってるよ

南部小 六年 奥山 琉惟

ラーメンかおすしか迷う春の店

南部小 六年 寒河江 颯樹

さくらんぼばふえのうえがよくにあう

寒河江小 一年 さとう ちさき

これさいごきめてもたべちゃうさくらんぼ

寒河江小 二年 木村 滉太郎

一つにも思い出つまつたさくらんぼ

寒河江小 六年 森岡 優真

ひまわりに背伸びであいさつ朝の道

西根小 一年 日塔 陽奏

さくらんぼをおにいちゃんといっしょにたべると2倍おいしい

西根小 三年 塩川 昊

こいのぼり月山せにして空泳ぐ

西根小 五年 小林 凜太郎

白球をナイスキャッチ白い雲

三泉小 四年 日下部 雅

サッカーの試合でゴール夏の雲

三泉小 六年 土田 蒼空

夕方のたいようのいろさくらんぼ

柴橋小 二年 奥山 みなと

ボール探し急にとび出すカエルかな

柴橋小 五年 柏倉 咲那

誕生日祖父が植えた桜咲く

醍醐小 五年 鈴木 壱智

よいいドンさくらの満開すぐにくる

群馬県城東小 五年 大場 葉月

春光にてらされねむる母発見

群馬県城東小 五年 小林 史菜

からっ風ブランコのチェーンあばれだす

群馬県城東小 五年 萩原 拓人

一面の菜の花広がる水彩画

群馬県城東小 五年 志賀 俐歩乃

春風にせなかおされてさか上がり

群馬県城東小 五年 吉田 優里

へいの上猫の春みん快い

群馬県城東小 六年 索 日福

チューリップまだねむいよとはんびらき

群馬県城東小 六年 池田 奏瑛

一年生さくらちる中おにごっこ

群馬県城東小 六年 館山 倫花

流れる音活気に満ちた春の川

群馬県城東小 六年 小島 咲姫

うぐいすと重唱しながら帰る道

群馬県城東小 六年 星川 はる

チューリップおどるすがたはバレリーナ

群馬県城東小 六年 名小路 祥平

春の朝ねこも私も大あくび

群馬県城東小 六年 島野 莉衣奈

晴れの日の菜の花まぶしい日曜日

群馬県城東小 六年 吉岡 実紀

さくらんぼきょうだいたくさんのしいな

埼玉県児玉小 四年 福地 結音

仲良しだよりそい笑うさくらんぼ

埼玉県勝呂小 四年 田中 巧一

パラパラときようかしよめくる春休み

群馬県藤岡第一小 二年 竹村 悠

父さんの酒酔いの顔さくらんぼ

東京都清和小 六年 古川 翔吾

ハチは巣にだきついたままたいこ鳴る

滋賀県一燈園小 五年 太田 慈

中学生の部

奨励賞

寒河江市立陵東中学校

岐阜県川辺町立川辺中学校

佐々木龍雄選

特選

雨上がり傘をおろせば空に虹

陵東中 一年

船田杏薫

星月夜とびたちそうに象の耳

岡山県東中 一年

田村英

鯉が匂祖母の背を見る台所

陵南中 三年

伊藤さくら

選評

佐々木龍雄

雨上がり傘をおろせば空に虹

船田杏薫

虹は雨が上がったすぐ後に目にすることが多い。傘を差してしばらく歩いていると、雨が止んだことに気づき、傘を畳むと周りの山々や樹木の緑の色が落ちつき美しい。徐々に太陽の光も見えてきて、雨と傘と虹の調和がリズム良く表現され、その場の情景が目につくかび写生のような句となっている。

星月夜とびたちそうに象の耳

田村英

デイズニーの名作「ダンボ」は一九四一年十月に公開され、日本では一九五四年初公開されたアニメの主人公である象の名前で、大きな耳を持つサーカスの象の赤ちゃんである。やがて空を飛べるようになった。作者はこのアニメは鑑賞したことはないと思うが、「とびたちそうに象の耳」ということは他の動物と比較すると、耳の大きいことを物語っている。多分この象に乗って楽しい星や月の世界へ飛んで行きたい心情なのかもしれない。夢のある俳句となっている。

鯉が匂祖母の背を見る台所

伊藤さくら

鯉の味が最もよい時季であろう。おばあちゃんが巧みに鯉を捌く後ろ姿が「祖母の背を見る」という表現で常日頃贈いの準備に動んでいる台所の情景を、いつも作者は見ている。おばあちゃんのように早くになりたいという思いと、家族の明るさが伝わってくる良い作品となっている。

近詠 消しゴムも子も円み来て卒業す

秀逸

満月に届かぬはずの手を伸ばし

陵東中 二年 菊地愛衣

黄砂舞う再度水拭き滑る床

陵西中 三年 加藤柚宇

春雷や眠りし大地目を覚ます

陵西中 一年 菊池真帆

さくらんぼパフェの上での主役かな

岐阜県川辺中三年 長谷部唯

佳作

打て繋げ一球入魂光る汗

陵南中 三年 矢萩想太

新しい出会いは春の訪れと

大阪府長交反中二年 門田結愛

やさしいよさくらんぼみたいな田中先生

埼玉県本庄特別支援学校二年 山中結月

わかれても心はいつしょさくらんぼ

岐阜県川辺中一年 田原遼一

秋風もろうそくを消す誕生日

静岡県熱川中一年 福沢天馬

入選

海の中銀にかがやく鰹の群れ

陵東中 一年 伊藤駿

音弱く線香花火消えてゆく

陵東中 一年 根岸龍之介

夏休み宿題残して母鬼化

陵東中 一年 小角友都

しんしんとまだやまぬのかゆきの声

陵東中 一年 海野由芽

七夕だ希望の紙で願回事

陵東中 一年 佐藤恋奈

花だより恵風にのり届きけり

陵東中 二年 相沢結望

高架橋通り抜けたら花吹雪

陵東中 二年 真木瑞葉

霧の奥いったいなにかかくれてる

陵東中 二年 増藤新

入学式慣れない制服腕通す

陵東中 二年 布川世絆

桜散りピンクに染まる遊歩道

陵東中 二年 菅井哲汰

受験生明日^{あした}やろうはバカやろう

陵東中 三年 土田 櫻太郎

朝霧や木造の宿湯の香の瀬

陵東中 三年 佐藤 克哉

夕焼けと門を背にする帰り道

陵東中 三年 阿部 心音

春眠の夢から起こす父の声

陵東中 三年 渡邊 陽生

受験生時よ止まれと願う日々

陵東中 三年 高橋 明衣

初日の出あかく染まった水平線

陵東中 三年 金森 莉玖

部活後にこっち向いてよ扇風機

陵東中 三年 渡邊 日和野

田水張る変わる景色と都市開発

陵東中 三年 門間 聖羽

熱帯魚虹のスカートなびかせて

陵東中 三年 大江 聡美

赤い糸溶けゆく花火泣いて風ぐ

陵南中 一年 笠原 一夏

隙間風風もおうちに入りたい

陵南中 一年 大沼 結音

ふと見れば風に流れて遊ぶ稲

陵南中 一年 森 誠太郎

さくらんぼひとみに写る赤い色

陵南中 一年 辻 奈々

灯籠に火を灯すならそこ通ろう

陵南中 一年 田澤 桜介

入学式次への扉開くとき

陵南中 一年 高野 悠愛

猫の恋実ってほしいと願う日々

陵南中 一年 設楽 みなみ

桜散り心のモヤも散っていく

陵南中 二年 東條 有紗

かえる達オーケストラの準備中

陵南中 二年 多田 恵人

春の日に勝利の涙泥まみれ

陵南中 二年 兼子 慎ノ介

炎天下白球見つめる球児達

陵南中 二年 佐竹 海夢

冬の夜みんなでかこむ鍋一つ

陵南中 二年 菖蒲 拓真

決意の春私は必ず騎手になる

陵南中 二年 安孫子 依万

菜の花で黄色く染まる帰り道

陵南中 二年 中島 翠花

天高し声援とどろく体育祭

陵南中 三年 上野 絃之介

春の田や満ちゆく水の美しさ

陵南中 三年 横尾 幸太

春眠や目覚まし時計も負けそうだ

陵南中 三年 村山 紗和

の前で弦引き弓道桜射る

陵南中 三年 伊藤 大

憂鬱な梅雨でも私は空を見る

陵西中 一年 伊藤 咲希

夏休み一人空飛ぶ羽田行き

陵西中 一年 瀧谷 有

帰り道染める光は春満月

陵西中 二年 大沼 空

鳥になり望む山々桜日和

陵西中 二年 高橋 亮

蚊の群れがこの身むしばむ大悪夢

陵西中 二年 浅木 杜和

鶯の声に寄り添う人が憎し

陵西中 三年 佐藤 海斗

鯉釣りや水面に映る夏の空

陵西中 三年 横山 迅斗

陽だまりの爺と話した山桜

陵西中 三年 渡邊 知恵理

お弁当桜のシャワー浴びながら

岐阜県川辺中 一年 梅村 伽良莉

パフエの上光り輝くさくらんぼ

岐阜県川辺中 三年 小栗 里珠沙

朝霧に紛れて佇む富士の山

静岡県熱川中 三年 稲葉 海斗

休日は早く起きれる春の朝

大阪府長吉六反中 二年 中田 咲希

風に舞うたんぽぽわたげの行く先は

鹿児島県保山中 二年 松元 愛央

高校生の部

武田菜美選

特選

逃水や土のにはひの直売所

愛知県名古屋高校三年 田 籠

瑛

秀逸

春の雪物理教師の誕生日

愛知県湯梨井学園高校三年

岩 田 侃 大

雪嗅ぎて太古を思ひ出せさうな

愛知県名古屋高校一年 富 田

輝

選評

武田菜美

特選 逃水や土のにはひの直売所

田 籠 瑛

晩春の強い日差しに照らされて、舗装された道路や草原などで遠くに黒い水溜りがあるように見えて、近づくにつれて消えてしまうのが逃水。地表の温度差によって生じるきわめて物理的な現象ながら幻想的な雰囲気を出し出す逃水と、直販所に並ぶ野菜の土の匂いを取り合わせた技量が見事である。幻の世と現実の世のギャップを垣間見た一瞬を鋭く捉えている。

秀逸 春の雪物理教師の誕生日

岩 田 侃 大

冬の雪とは違って降りつつも消えて行くのが春の雪。淡雪、牡丹雪とも呼ばれる柔らかさが、物理教師の理路整然と物事を解き明かすきまじめさを際立てている。また今日が先生の誕生日の一言で作者との親しさも感じられる。春は卒業、転任と別れの多い季節。この雪は名残を惜しむ雪とも思われる。

秀逸 雪嗅ぎて太古を思ひ出せさうな

富 田 輝

雪に匂いがあるかどうかと問われても、例えばラベンダーの香りのようなはつきりとした答えは返せない。しかし昨日まで地表にあった諸々の匂いが雪に覆われて消されるからして、匂いがないのが匂いかもしれない。この不確かさが、太古を思い出せそうで思い出せないもどかしさに似ている。現代を生きる作者には、太古を生きた祖先の暮らしの記憶が有るはずもないが、同じ遺伝子を持つ者としてどこか懐かしさと呼び覚まされた一時を、十七音に圧縮している。

近詠 万華鏡一期一会の春惜しむ

佳作

山躑躅馬小屋の釘錆びてをり

山形県山形東高校二年 東海林 あや

桜桃や地球の双子としての月

高崎商科大附属高校三年 福島 環

時間割とふ檻にゐてうららかや

角川ドワンゴ学園S高校一年 田村 豪

入選

夏草の匂いきわだつ雨の夜

山形県谷地高校二年 伊藤 美風

シャッター青春を閉じこめ時刻む

山形県谷地高校三年 白田 夏希

つくしんぼ気づけば遠く伸びる影

山形県谷地高校三年 森 愛花

あせるぼくさくらんぼには種がある

愛知県中川青和高校二年 芳野 隆成

コウモリや意外とできない逆上がり

愛知県豊橋西高校一年 森谷 泉美

星涼し宇宙を見上げ夢の中

山形県左沢高校二年 富樫 涼香

陽春や少し大きいランドセル

山形県山形南高校三年 大宮 慧太

春の星池の面にも咲きにけり

山形県山形南高校三年 柏倉 丈

米つつじ画鋏散らばるやうに咲く

愛知県名古屋高校一年 武田 直弥

藤浪や刺繍に裏の犇きて

愛知県名古屋高校二年 山本 理貴

浅黒き祖父の手優しさくらんぼ

山形県霞城学園高校二年 荒木 七海

春星や絵本はねむるための本

愛知県名古屋高校一年 三輪 修平

佳きことの始まる予感さくらんぼ

山形県谷地高校一年 大熊 心夏

春の星ひとつくらゐは宇宙船

愛知県名古屋高校二年 関谷 諒太

三等車降りふるさとの暑さかな

千葉県海城高校三年 豊原 一誠

選者略歴

細谷 嘯々 先生
りょうりょう

〔著者略歴〕

〔朔出版細谷嘯々句集』『父の夜食』

紹介日Pより「〇二四・一一・一九

昭和23年1月2日山形生まれ。本名

亮太。小児科医。

東北大学在学中に石川桂郎に師事。

昭和45年「風土」同人。

昭和50年桂郎死去後、「風土」を去り、

同門の島谷征良の「一葦」創刊に参

加、同人。

平成15年「件」創刊に参加、同人。

句集に『桜桃』『二日』、エッセイ集

に『パパの子育て歳時記』

『小児病棟の四季』『生きるために、

一句』『いつもいいことさがし1、

3』ほか、坪内稔典、仁平勝との共

著『句の一句』などがある。

〔鯉帖の会〕宗匠。

〔社〕俳人協会評議員。

武田 詩子 先生

俳誌「森の座」同人

「青瓢俳句会」幹事

「詩音俳句会」代表

公益社団法人俳人協会々員

山形県俳人協会々員

松田 弘三 先生

寒河江市生まれ

俳誌「森の座」無鑑査同人

「青瓢俳句会」共同代表

公益社団法人俳人協会々員

山形県俳人協会々員

加藤 仁 先生

俳誌「森の座」無鑑査同人

公益社団法人俳人協会々員

「青瓢俳句会」代表

山形県俳人協会々員

阿部 栄子 先生

「詩音俳句会」会員

佐々木 龍雄 先生

俳誌「森の座」同人

公益社団法人俳人協会々員

「青瓢俳句会」共同代表

山形県俳人協会々員

武田 菜美 先生

俳誌「銀化」同人

「山寺俳句塾」代表

「赤とんぼ」俳句会々員

公益社団法人俳人協会々員

山形県俳人協会常任幹事

学校法人NHK学園俳句部門講師

句集「梨の芯」

応募句数 四、四三六句

小学生の部 一、七六八句

中学生の部 一、一六〇句

高校生の部 五七四句

一般の部 九三四句

第五十四回 さくらんぼの都市さがえ
全国俳句大会

第四十五回 さくらんぼの都市さがえ
全国小・中学生俳句大会

〒九九一〇〇二一

山形県寒河江市中央二丁目七番十四号

寒河江市立図書館内

さくらんぼの都市さがえ

全国俳句大会実行委員会事務局

TEL (〇二三七) 八六一一六六二